様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２６９１

研究課題名（和文）日本手話における文末指さしの指示対象に関する統語研究

研究課題名（英文）A syntactic study of referential properties of clause-final pointing in JSL

研究代表者
内堀　朝子（Uchibori, Asako）

東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・准教授

研究者番号：７０３６６５６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，日本手話(JSL)における文末指さし，即ち一文の終端に任意に現われる指さしを取り上げ，その指示特性を調べた。先行研究によれば，JSLの文末指さしは，文主語または文頭の話題化要素を指示対象とすることができる。本研究で話題化要素となる名詞句の指示特性について，文末指さしが自然に生起し得る文脈において確かめた結果，文末指さしが指示する話題化要素名詞句の定性および特定性の可能な組み合わせは，代名詞とは異なることが分かった。文末指さしは手話言語における代名詞としての指さしが何らかの理由で文末に置かれたものではなく，文の周縁構造において文法的一致のような一定の統語機能を担うものと考えらえれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　人間の持つ言語能力の本質を，音声言語・手話言語という言語の出力方法の違いに左右されない深いレベルで解明していくためには，統語理論に基づく手話言語の研究が必要不可欠である。日本手話についての研究は，他の手話言語を対象とした研究との比較対照が可能となるような言語理論に基づくものが未だ不十分な段階にある。本研究は，いっそう進めていく必要のある日本手話の具体的な統語研究の一端として位置付けられる。同時に，このような研究が日本手話の自然言語としての本質を明らかにすることにつながり，それが日本手話に対する日本社会における理解，即ち手話使用者の有する独自の言語文化への理解を深めるための重要な基盤となる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated referential properties of clause-final pointing in Japanese Sign Language (JSL), i.e., finger pointing which optionally appears at the end of a sentence. According to previous research, clause-final pointing in JSL refers to the subject or a topicalized phrase, which occurs at the beginning of a sentence. In this study, referential properties of those topicalized phrases were closely examined under various contexts where sentences with clause-final pointing are naturally used. It is revealed that the topicalized noun phrases which clause-final pointing refers to have referential properties different from those of pronouns in terms of definiteness and specificity. In conclusion, clause-final pointing is not a pronoun, of which phonological form is pointing in sign language, that is located at the end of a clause for some reason, but rather an element that plays a certain syntactic function, such as grammatical agreement, in the clause-peripheral structure.

研究分野：統語論

キーワード：統語論　日本手話　指示特性　文末指さし　話題要素

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

手話言語には，音声言語の指示代名詞と同じ機能を持つ要素として，「指さし」がある。さらに，手話言語では指さしが一文の終わりに現われる，いわゆる「文末指さし」が広く観察されている。例えばアメリカ手話では，Padden (1983)が，文末指さしのことを‘Subject Pronoun Copy’と名付け，常に主語を指示対象とすることを指摘している。一方，オランダ手話では，Crasborn et al．(2009)が，文末指さしが文頭の話題要素を，それが主語でない場合でも指すことができると報告している。

興味深いことに，日本手話の文末指さしに関する先行研究には，アメリカ手話同様に主語を指すという報告（鳥越(1994)など）と，オランダ手話同様に文頭の話題要素を指すという報告（原・黒坂(2013)，小林・原・内堀(2014)）の二種類がある。

そこで，本研究は日本手話の文末指さしを扱って，主語を指す場合および話題要素を指す場合のそれぞれを詳しく調べ，日本手話における文末指さしの統語的性質を言語学上の観点から分析することとした。

２．研究の目的

本研究は，手話言語の特性の一つとされる指さしを用いた指示表現のうち，特に文末に任意に出現するいわゆる「文末指さし」に注目し，その統語的性質を明らかにすることを目的とする。

日本手話では例文(1)にある通り，文末指さしは主語を指すことができる（以下，指さしを「PT」と表記）。

(1) PT_1　PT_3　好き　PT_1　‘私が彼を好きだ’

これに対して，主語以外であっても文頭に話題要素として現れている場合は，文末指さしの指示対象となれるとの報告がある（原・黒坂（2013））。例文(2)は，文末指さしが，文頭で話題要素となっている目的語を指していることを示す。

(2) $\overline{\text{本}}^{\text{TOPIC}}$　PT_1　田中　あげた　$PT_{3本}$　‘本は私が田中にあげた．’

この例文で，文頭の「本」は，日本手話の「話題化のための非手指標識」（典型的には，眉上げ・見開き・うなずきの後，短い間が続く）を伴っている。

さらに，岡・赤堀（2011)は，文末指さしが，他動詞の目的語が文頭ではなく標準的な目的語位置にある場合でもそれを指すことができ(岡・赤堀(2011: 73(4)))，また，その場合は日本語訳では受動文に相当する意味を持ち，日本手話における受動文であると見なすことができると主張している。しかし一方，原・黒坂（2013)はこの種の例文を容認度が低いとしており，この点に関して先行研究の記述は一致していない。

以上から，日本手話の文末指さしを含む文については，１節で触れた手話言語における文末指さしの類型に関わる問題のほか，少なくとも以下の２つの重要な問題があることが分かる。

問題Ｉ：話題要素を含む文においては，文末指さしは文中のどのような要素を指示対象とすることができるか？

問題 II：文末指さしが主語以外及び話題要素以外を指す場合について，日本手話における受動文と考える独立の根拠はあるか？

本研究ではこれらの問題に取り組むことにより，日本手話の文末指さしの統語的性質を明らかにすることを目的とする。問題Ｉに関しては，特に，文末指さしはその語順から CP 領域に生起している可能性が考えられ，また音声言語での研究から話題要素も CP 領域にあると考えられるため，文末指さしの持つ役割が CP の構造に関わる統語的なものか，あるいは形態上の見かけ通り代名詞的なものかを検討する。問題 II については，一般に手話言語では動詞屈折要素が形態的に乏しく，従来，受動文に関する問題はあまり議論されてこなかったが，本研究では，文末指さしという新たな観点から受動文の証拠を提示できる可能性を探る。

３．研究の方法

２節で述べた問題Ｉについては，「話題要素担当グループ」においてデータ収集し，整理する。特に，文末指さしが指示対象とする話題要素が，自然に出現する文脈を設定するようにする。

問題 II については「非項/陰在的項担当グループ」が担当し，先行研究によるデータの記述に不一致があるため，何が中核的な事実であるのかに注意して，データを調べる。特に，音声言語における受動文の先行研究による知見にも基づき，音声言語の受動文における特徴的な要素とされる動作主の意味役割を持つ非項及び陰在的項（Bruening (2013)）について，文末指さしがそれらを指示対象とするかどうか，調査する。

４．研究成果

まず，問題 II に関しては，「非項/陰在的項担当グループ」によるデータ収集により，以下の問題点が明らかとなった。すなわち，非項・陰在項と同一指示となる話題要素が文頭に生じるような文において，文末指さしがその話題要素を指示できるデータがあった。この事実から，日本

手話の文末指さしを含む文が非項・陰在項の存在を示すかどうかという問題は，文末指さしが話題要素を指示対象とする文の統語特性に関する問題と，並行して扱うことは適切ではないことが判明した。このことは，本研究の枠組みの中では，日本手話における受動文の存在を文末指さしの指示対象を元に分析する手法が不十分であることを意味する。岡・赤堀(2011)が受動文と主張している例では，文末指さしが主語ではない非話題要素を指示しているため，日本手話における態については，今後，文末指さしの特性のさらなる研究を進めた上で，受動態の有無を始めとした基礎的な研究が必要と考えられる。

一方，問題Ｉに関しては，「話題要素担当グループ」により，以下の成果が得られた。まず，本研究では，日本手話において文頭に話題化非手指標識を伴う要素と，その要素を指示対象とする文末指さしの両方を含む文が，日本手話母語話者にとって自然であると判断される文脈を設定し，該当する例文を収集してきた。この中で，先行研究で文末指さしの指示対象として可能だと報告されている話題要素と主語の両方が文中に明示的に存在している場合，話題要素が優先されるというデータがあった。ただし，この場合文末指さしを直示的に用いているのではないことを，場面・文脈設定上保証しなければならない。その上で，この事実は，文末指さしの統語的役割として話題要素との関係を優先させている可能性を示唆するものであった。

また，このデータ収集を通じて，日本手話の文脈依存性が極めて高いことから，例文の調査においては，常に以下を注意する必要があることが分かった。一つには，文脈に依存して発話が選択されているため，文の意味に曖昧性を持たせることが難しく，常に特定の文脈の下で適切な一つの文が決まるように見えるため，一つの文を提示して，それが当てはまる複数の文脈を想定することが容易にはできない。また，同じ理由で，文中の要素を省略することが極めて多く，何らかの文脈の下で文の全ての要素を可視化させると，「不自然」「冗長」「くどい」という判断につながってしまい，文法性判断を求めるのが難しい。本研究ではこれらに留意しながら調査したが，今後の研究においても役立つ調査手法の認識を得ることができた。

データの分析においては，従来，文末指さしの持つ音韻特性と音声言語の接語との類似性が指摘されているため(鳥越(1991)，市田(2005))，音声言語の接語重複に関する先行研究(Anagnostopoulou (2017)など)の結果と比較してみることとした。すなわち，ギリシャ語等で目的語接語と目的語が同時に生起する場合と，日本手話で目的語が話題要素となり，それを文末指さしが指示する場合の比較である。なお音声言語でも手話言語でも，これらの要素は形態的に代名詞と同じである。音声言語の接語重複に関する先行研究においては，特定性を必要とする制約(Specificity Condition)があることが議論されている。そこで日本手話にもその点に並行性が見られるかどうかについて焦点を置き，文末指さしの指示対象となる話題要素名詞句の話題性・定性・特定性等，指示素性に関して，適切な文脈を設定して例文を収集し，分析を行った。

その結果，概略以下が判明した。

(3) 日本手話の文末指さしに，Specificity Condition 効果は見られない。したがって，日本手話の文末指さしは，ロマンス諸語の二重接語現象に見られる接語とは異なる統語的特性を持ち，特に，ロマンス諸語の接語と同様の代名詞性は持っていないと考えられる。

(4) 日本手話の文末指さしの指示対象となる名詞句の指示特性について，[+/-Topic]と [+/-definite(定不定)]，[+/- Specific(特定非特定)] の組み合わせについて検討した結果，文中で指示代名詞的に用いられる指さしの持つ指示特性と，異なる組み合わせを許す場合があった。したがって，文末指さしは，代名詞としての指さしとは，統語的に異なるものと言える。

これらに関連する具体的な例文および適切な文脈については，今西・内堀(2021)で報告したところであるが，さらなる詳細を含めて，令和 3(2022)年度刊行予定の手話言語学に関する書籍の一章として，出版する予定である。

本研究が明らかにしたこれらの点は，上で述べた話題要素を優先して指示対象とする事実も併せれば，さらに次のような可能性を考えさせるものであると言える。

(5) 日本手話における文末指さしが，話題要素であればその指示特性を問わず指示でき，主語に対しても優先させるものであることから，節周縁部の主要部における話題一致の具現化という可能性がある。

この可能性については内堀(2018)が既に指摘しているが，本研究結果も具体的事実に基づいてこれを支持するものであったため，今後の研究課題として，さらに探求していくこととしたい。

＜引用文献＞

Anagnostopoulou, Elena. (2017) “Clitic doubling,” In *The Wiley Blackwell Companion to Syntax, Second Edition*. eds. by Martin Everaert and Henk C. van Riemsdijk. pp.519 - 581. Hoboken, New Jersey: Wiley-Blackwell.

Bruening, Benjamin (2013) “*By* Phrases in Passives and Nominals.” *Syntax* 16: 1-41.

Crasborn, Onno, Els Van Der Kooij, Johan Ros, and Helen De Hoop(2009) “Topic Agreement in NGT,” *The Linguistic Review* 26: 355-370.

Padden, Carol A. (1983) Interaction of morphology and syntax in American Sign Language. Doctoral dissertation, University of California, San Diego.

原大介・黒坂美智代 (2013)“日本手話の文末指さしが指し示すものは何か.”日本手話学会第39回大会口頭発表.

市田泰弘（2005）「手話の言語学（6）空間の文法―日本手話の文法（2）「代名詞と動詞の一致」」『月刊言語 34-6：90-98．大修館書店．
小林ゆきの・原大介・内堀朝子(2014)“日本手話の文末の指さしに関する一考察―aboutness topic を含む文における文末指さしを中心に．”日本手話学会第 40 回大会口頭発表．
岡典栄・仁美（2011）『<文法が基礎からわかる>日本手話のしくみ』．東京：大修館書店
鳥越隆士（1991）「日本手話の文末の位置について」『手話学研究』12：15-29．
内堀朝子(2018)「ラベルに寄与する素性について－手話言語研究から」．慶應言語学コロキアム招待講演．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 上田由紀子，内堀朝子	４．巻 27
２．論文標題 日本手話のいわゆる動詞句削除現象－非手指表現に注目して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語科学研究（神田外語大学大学院紀要）	６．最初と最後の頁 23-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hiroshi Baba and Kazumi Matsuoka	４．巻 1
２．論文標題 Phonological Contact in Kana-based signs in Japanese Sign Language: A preliminary study	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Minpaku Sign Language Studies	６．最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高藤朋史，三輪誠，佐々木裕，原大介	４．巻 26
２．論文標題 コーディングと動画を併用した日本手話音節の適格性予測	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語処理学会第26回年次大会発表論文集	６．最初と最後の頁 259-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Watanabe, Keiko, Yuji Ngashima, Daisuke Hara, Yasuo Horiuchi, Shinji Sako, and Aikra Ichikawa	４．巻 21
２．論文標題 Construction of Japanese Sign Language Database with Various Data Types	５．発行年 2019年
３．雑誌名 HCI International 2019-Posters, 21st International Conference, HCII 2019, Orlando, FL, USA, July 26-31, 2019	６．最初と最後の頁 317-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中野聡子，後藤睦，原大介，金澤貴之，細井裕子，川鶴和子，楠敬太，望月直人	4．巻 20
2．論文標題 学術手話通訳における原語借用の分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 通訳翻訳研究への招待	6．最初と最後の頁 141-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Natsuko Shimotani	4．巻 101
2．論文標題 Head Nod as a Prosodic Cue in Japanese Sign Language and Its Use by Native Signers and Non-native Interpreters	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Senri Ethnological Studies	6．最初と最後の頁 71-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masayuki Komachi, Hisatsugu Kitahara, Asako Uchibori, Kensuke Takita	4．巻 50
2．論文標題 Generative Procedure Revisited	5．発行年 2019年
3．雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 269～283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yano Uiko、Matsuoka Kazumi	4．巻 18
2．論文標題 Numerals and Timelines of a Shared Sign Language in Japan: Miyakubo Sign Language on Ehime-Oshima Island	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Sign Language Studies	6．最初と最後の頁 640～665
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1353/sls.2018.0019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yukiko Ueda	４．巻 52
２．論文標題 An FM & LA Approach to Relative Quantifier Scope Calculation	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英語と英米文学	６．最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　10件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 内堀朝子，今西祐介
２．発表標題 日本手話の文末指さしが指すものを調べる
３．学会等名 日本英文学会第93回大会シンポジウム「手話言語学の実際」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 内堀朝子
２．発表標題 手話言語学春期講座統語論
３．学会等名 東京手話言語学研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 上田由紀子，内堀朝子
２．発表標題 日本手話の削除現象から見えてくること：動詞句削除現象から
３．学会等名 慶應言語学コロキアム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 内堀朝子・上田由紀子
２．発表標題 日本手話における動詞句削除と目的語項削除
３．学会等名 生成文法研究会（慶應義塾大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 上田由紀子・内堀朝子
２．発表標題 日本手話における非手指副詞，動詞，目的語の語順について
３．学会等名 日本言語学会第158回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 内堀朝子
２．発表標題 日本手話の統語分析：WH，指さし，動詞句などを例として
３．学会等名 慶應言語学コロキアム「手話言語学夏期講座」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 内堀朝子
２．発表標題 手話って何？～言語学から見て
３．学会等名 杉並区手話講習会特別講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松岡和美
２．発表標題 日本手話における時制と連動した非手指アスペクトマーカーの予備的研究
３．学会等名 日本言語学会第158回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 矢野羽衣子・松岡和美
２．発表標題 愛媛県大島宮窪手話における一致動詞の空間使用
３．学会等名 日本言語学会第158回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松岡和美
２．発表標題 Grammatical properties of mouth gestures in Japanese Sign Language
３．学会等名 Workshop on Sign Linguistics（国立情報学研究所）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 市川熹，長嶋祐二，堀内靖雄，原大介，酒向慎司
２．発表標題 超高齢化時代が対話システムに求める物理層の基盤的特性
３．学会等名 言語・音声理解と対話処理研究会，人工知能学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hara, Daisuke, and Makoto Miwa
２．発表標題 The phonotactics of type-III syllables of Japanese Sign Language
３．学会等名 Theoretical Issues in Sign Language Research 13 (TISLR13)
４．発表年 2019年

１．発表者名 市川熹，長嶋祐二，堀内靖雄，原大介
２．発表標題 「一体的リズム」と「分析的リズム」 ～ 実時間対話機能に関する試論 ～
３．学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（HCS），電子情報通信学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hara, Daisuke, and Makoto Miwa
２．発表標題 The Well-formedness and the Ill-formedness of JSL Type-III Syllables
３．学会等名 The Chicago Linguistic Society 55th Annual Meeting
４．発表年 2019年

１．発表者名 今西祐介
２．発表標題 日本手話の文末指さしに関する統語的研究
３．学会等名 関西学院大学手話言語研究センター研究成果報告会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小町将之，瀧田健介，内堀朝子，北原久嗣
２．発表標題 併合手続きを再考する
３．学会等名 日本英語学会第36回大会ワークショップ（横浜国立大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Asako Uchibori
２．発表標題 Some Notes on Syntactic Functions of Finger Pointing in Japanese Sign Language
３．学会等名 新学術領域研究「共創的コミュニケーションのための言語進化学」Evolinguistics Meets Signed Language（京都大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kazumi Matsuoka
２．発表標題 Syntactic and Semantic Properties of Modals and Modal Verbs in Japanese Sign Language
３．学会等名 新学術領域研究「共創的コミュニケーションのための言語進化学」Evolinguistics Meets Signed Language（日本大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kazumi Matsuoka
２．発表標題 Modals and Negation in Japanese Sign Language: Investigating the Right Periphery
３．学会等名 Fifty Years of Linguistics at UConn（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Daisuke　Hara
２．発表標題 A Remark on the Well-formedness of Syllables in Japanese Sign Language
３．学会等名 新学術領域研究「共創的コミュニケーションのための言語進化学」Evolinguistics Meets Signed Language（日本大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 原大介，中野聡子，米田拓真
２．発表標題 日本手話通訳者は日本手話の不適格音節を正しく判定することができるか
３．学会等名 日本手話学会第44回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Asako Uchibori and Yusuke Imanishi
２．発表標題 Does clause-final finger pointing refer to a null topic in JSL?
３．学会等名 The 6th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤田元，北原久嗣，内堀朝子
２．発表標題 なぜ言語には非付値素性が存在するのか？－非付値素性：その本質，起源，および役割
３．学会等名 日本英語学会第35回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 内堀朝子
２．発表標題 ラベルに寄与する素性について－手話言語研究から
３．学会等名 慶應言語学コロキアム
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 松岡和美（分担執筆）／窪薗晴夫編著	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 232
３．書名 よくわかる言語学	

１．著者名 松岡和美（分担執筆）／大津 由紀雄、浦谷 淳子、齋藤 菊枝編	４．発行年 2019年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 288
３．書名 日本語からはじめる小学校英語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	上田　由紀子 (Ueda Yukiko) (90447194)	山口大学・人文学部・教授 (15501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	今西　祐介 (Yusuke Imanishi) (80734011)	関西学院大学・総合政策学部・准教授 (34504)	
研究分担者	松岡　和美 (Kazumi Matsuoka) (30327671)	慶應義塾大学・経済学部（日吉）・教授 (32612)	
研究分担者	下谷　奈津子 (Natsuko Shimotani) (20783731)	関西学院大学・産業研究所・助教 (34504)	
研究分担者	原　大介 (Daisuke Hara) (00329822)	豊田工業大学・工学部・准教授 (33924)	
研究分担者	小林　ゆきの (Yukino Kobayashi) (80736116)	筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・講師 (12103)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関